

第3章においては、症例の栄養摂取状況等による分類をして、それぞれのグループについて実状と退院後の指導のあり方について以下のごとく考察を行った。

- ・対象者17名中仕事を持っていた者は14例で12例は復帰していたが、職場や仕事内容が栄養摂取状況に有利な職場と不利な職場があり、職場環境を知った上での食生活指導ができると有効。
- ・術前に肥満傾向（BMI25以上）であった者もあり、術後の食事量との兼ね合いで、標準体重やBMIの計算法を指導しておくことと不安の軽減に繋がる。
- ・術後の食事品目数の多いことはバランスのよい食事であるので望ましいが、そのためには食事を作る、あるいは手伝う家族の理解が必要で、早い回復に繋がる。
- ・手術成績がよいことを知らされていると心の健康状態がよい。
- ・あたたかい家族の支援はよい経過につながる。
- ・術後にエネルギー量の過剰な状態の症例もあったことから、必要摂取量の目安の指導が、食べられないことへの不安の軽減に有効。
- ・自分が必要とされていると実感し、それを受けて自分から早くよくならなくてはという気持ちを持つことが良好な経過に繋がった症例が複数例あり、生き甲斐の重要性が認識できた。
- ・胃切除を受けた友人からのアドバイスに支えられたと述懐した症例もあり、同病の会のごとき活動やそれからの情報は外科患者にも有効。
- ・退院時に手術後の一般的経過を紹介しておくことは有効。

これらの所見から、以下の結論が得られた。

これまでのところ、胃切除等の手術を受けた後の実際の生活の場を通じてのフォローはほとんど行われてきていないが、患者が社会復帰して活動していくためには、継続的な支援活動を行うことが極めて重要であること、そのためには病院に追跡指導のできる人員の配置や、地域の支援専門職（看護師、保健師、栄養士、社会福祉士等）を充実して、退院後の継続的支援を可能にするシステムを構築することの意義は大きい。

これまで癌等の外科手術の効果判定には、3年後、5年後等の生存率等が上げられているが、これからはその患者のQOLや生き甲斐感までを含めた実生活のフォローが必要であり、そのための地域での多彩かつきめ細かい福祉活動が望まれる。

論文審査の結果の要旨

論文提出者星野泰栄は、看護師及び助産師の資格取得後、群馬大学医学部付属病院において臨床に従事しながら、同大学大学院医学系研究科修士課程を修了し、修士の学位を取得している。本論文は病院勤務中に担当した胃切除患者の手術後の食生活の実態を家庭訪

問等により3年間にわたって追跡調査し、それが生活全般及びQOLに与える影響について詳細に考察を加え、今後の医療と地域における継続的支援の必要性とそのあり方について論じたものである。

また、星野泰栄はこれまでに、修士論文の他に、日本公衆衛生雑誌、職業・環境アレルギー誌、及び上武大学看護学部紀要に計4編の論文（共著）を発表している。

論文審査に当たっては、本人の研究歴および論文内容についての発表を受けた後、論文内容及び論文に関連する専門知識に関わる質疑応答を、英文資料の内容を含めて行った。また、本人は群馬大学大学院博士課程在学中に英語の学力試験に合格している。これらにより、本人の学力が十分であることを認めた。

本研究は、胃切除患者の食生活を中心とする退院後の生活全般を、生き甲斐を持つ状況や周囲の人の支援の状況までを含めて、3年間にわたって調査し、今後の手術後患者の継続支援の必要性を具体的に論じたものである。保健福祉分野ではこれまでに行われることの少なかった地域医療福祉支援活動に関わる具体的研究であり、医療と継続看護、地域看護の連携を実践した研究である。これからの地域医療福祉支援活動の実践と体制構築に直接役立つものと考えられた。

以上により、論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。